

共にしあわせ産みだす党 日本共産党 市議団ニュース

第1952号 2020年07月05日
日本共産党 根室市議団
根室市宝林町4-203 Tel.0153-23-6023



共同経済活動の拠点、沿岸資源の増大へ 根室市栽培漁業研究センター



北方四島との共同経済活動に貢献することが期待される種苗生産施設「根室市栽培漁業研究センター」が、この6月からホツカイエビの育成など本格的な稼働がスタートしています。

既存の水産研究所と接続した渡り廊下を抜けると、新しい施設の水槽室に。室内が明るいのは蛍光灯以外に、いくつかの窓や天井から自然の光が入ってきているためです。太陽を浴びることで病気に強い個体が育ちやすいそうです。



水槽室。小学校の体育館だったら、二個くらい入りそうなくらいに大きい。

飼育用の5t水槽とろ過用水槽や断熱機能水槽等が入っています。水槽一基で、稚ガニが約5〜6万匹も飼育できるそうです。

多様な魚種の飼育や飼育環境の変化をつける試験数を増やすこと、また病気などの危険性を分散するために、大きな水槽でなく5トンサイズにしています。ハナサキガニは、将来的に120〜130万尾の生産を目指しているとのことでした。

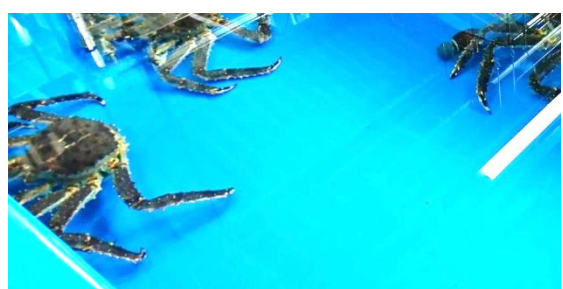


現在、水槽には、6月に孵化したばかりのホツカイエビが約9万尾飼育されています。3週間ほどの稚エビは、少し大きな黒い茶柱のように見えます。水槽に入れた網に植物プランクトンを附着させてエサにしています。運営サイクルとして、1月〜2月ごろに孵化した花咲ガニを5月まで飼育して放流し、その後すぐに6月〜9月までホツカイエビを飼育して、3cmほどの大きさになっているから、放流するそうです。

花咲ガニで培った研究成果と技術を活かして、タラバガニの養殖に向けた研究が進められています。今年2月に4漁業と「根室市タラバガニ養殖協議会」を設立。他施設から提供を受けた親ガニから、今年1月に幼生が誕生。

3月〜4月ごろ稚ガニの姿になったそうで、施設見学した6月下旬には、小指の爪くらいのサイズに成長していました。タラバガニは1kgサイズになるまで通常は6年かかり、陸上で長期間養殖するには、大変なコスト高です。ただ水温をあげることで、4年で1kgに成長させたという研究結果もあるそうです。

センターでは「様々なチャレンジをしながら、どのような課題があるのか明確にして、将来に向けて選択肢を広げていきたい」と話していました。



タラバの親ガニ。今年3月に交尾して、そのうち3匹が卵をもっているそうです。



6月に孵化したヤナギダコ。すでにタコの姿をしていて、スミも吐く。

北方四島との共同経済活動では、この施設を拠点としてウニなどの複数魚種の種苗生産をおこない、四島海域等に放流することが考えられます。しかし日口交渉がどうなるのか、進展が全く見えない状況です。現在は沿岸漁業振興策として、ハナサキガニ、ヤナギダコ、ホツカイエビ、そして新たにタラバガニ等の取り組みを進めています。これまで開発した生産技術を最大限に活かして、栽培漁業の推進に寄与することが期待されています。

ただし大規模な施設だけに燃料費や光熱水費等の経費も大きく、今年度予算で運営費は約3500万円と見込まれています。さらに今後、水産技術など体制も充実させていく必要があります。

そうした観点からも四島における共同経済で漁業の分野で進展が図られ、また栽培漁業研究センターの運営に対する国の財政支援が今後必要と考えます。

介護保険の基金のこと

左のグラフは、根室市の介護保険の基金（いわゆる貯金の年度末残高）です。根室市は2012年度から3年毎の見直しのたびに、65歳以上の介護保険料を引き上げてきました。しかし結果的に毎年、財政が余るため、基金がこれだけ積み上がっています。

未来の予測は難しいモノですが、さすがに3億円以上も基金を貯め込むのは多すぎます。少ない年金の中で、介護保険料を払うことはとても大変なことです。来年度はまた介護保険料を見直す年になります。市としても、この状況を十分に勘案し、次期は過大な保険料とならないように対応することを強く求めます。

